



デフアスリートを ささえる *vol.1*



ごあいさつ

全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会委員長
小椋 武夫



スポーツ庁は「する・みる・ささえる」といった多様なスポーツライフを通じて、スポーツ参画人口の拡大を目指しています。アスリートのプレーを「みる」、ボランティアの「ささえる」活動を通して、「する」スポーツへの興味が喚起され行動へとつながることが期待されており、きこえない人のスポーツ活動を通じた社会参加と共生社会の実現にも通じる取組になります。

きこえない人がアスリートのプレーをみるためには、スポーツ施設の情報アクセシビリティ向上、放送の字幕・手話言語付与などの整備が進められています。一方、きこえないアスリート(デフアスリート)がスポーツをするにあたっては、スポーツ関係者によるきこえないことや手話言語への理解促進とともに、デフアスリートのスポーツ活動をささえる日本手話言語通訳者の育成が重要になっています。

本委員会が受託しました、スポーツ庁の令和2年度「障害者スポーツ推進プロジェクト事業」は、スポーツに精通した手話言語通訳者の育成を主な目的としています。そこで、スポーツ分野で通訳者が準備すべき内容の基礎として、きこえない人のスポーツ活動の歴史と現状を紹介するパンフレット、サッカー競技と自転車競技を解説するパンフレット、開会式や表彰式で歌われる国歌の手話言語試行版パンフレットと動画を製作しました。スポーツ活動の現場で通訳を行う方々の知識と技術の向上にこれらの手引が役立つことを願っています。

スポーツ分野で通訳するための準備

きこえない人のスポーツ活動を通じた社会参加を支える手話言語通訳者が、通訳者としての倫理観を備えた上で準備しておくべき知識と技術を、「共感力・協働力」、「言語技能・表現力」、「場面对応力、実践力」、「スポーツ関連・競技ごとの専門知識」の4テーマに整理しました。



このハンドブックは、学校のスポーツ活動、一般の行事や競技大会への参加、デフスポーツ活動に、きこえない人がどのような形で参加し、どのような体験をできているのかを概観する構成としています。書籍や動画の紹介もしていますので、スポーツ分野の通訳に対応できる共感力・協働力を養うに必要な知識・情報の入門編としてご活用ください。

学校でのスポーツ活動

▶ ろう学校の生徒数

ろう学校に学ぶ児童・生徒の数は1965（昭和40）年に約2万人であったのが、2000（平成12）年には約7千人と減少しています*。つまり、今を生きるきこえない人たち、50歳代は生徒数の多かったろう学校を経験した人が多く、20歳代は生徒数の少ないろう学校、またはきこえる生徒の環境（地域の学校）で教育を受けた人が多いということです。ろう学校の言語、コミュニケーション環境にも変化があり、これらによって学校時代におけるきこえない人のスポーツ体験は多様なものとなっています。

*国立特別支援教育研究所教育相談情報提供システムのウェブサイトによる

ろう学校生徒の大会出場権の剥奪

1967（昭和42）年の千葉県高校総体の陸上競技に、ろう学校高等部3年生の選手が出場し、100m=11秒4、200m=22秒6の記録で優勝しました。しかし、全国高等学校体育連盟は、ろう学校選手の関東地区大会への出場を認めませんでした。理由は「ろう学校は高体連に加盟できない」ということにありました。関係者の抗議により、その生徒の大会への参加は認められたものの、非公式での参加を余儀なくされました。200m走では優勝選手を上回る記録を出しています。

詳細は『1947-2016全日本ろうあ連盟70年史～社会への完全参加と平等を目指して～（P142～149）』にまとめられています。



▶ ろう学校のスポーツ活動

生徒数の減少によって、体育授業や運動部で、組体操や団体競技（チームスポーツ）ができなくなったろう学校が増えています。野球部やバレーボール部の存続が難しくなり、卓球部や陸上部など個人競技の活動が中心になっています。最近ではバドミントン部の創設が見られます。なお、ろう学校の全国大会は高等部の陸上と卓球の2競技のみであり、野球やバレーボールの全国大会が欲しかったという回想が多くあります。

ろう学校の児童・生徒は一般の大会にも参加していますが、過去には参加を認められなかった例がありました（下記コラム参照）。その他にも、児童・生徒が審判を担当し合う時などに不便さを感じるなどの課題があります。

ろう学校野球部の高野連加盟の拒否

沖縄県での1960年代の風疹大流行により多く生まれたきこえない生徒を受け入れるために、創設された北城ろう学校の高等部に硬式野球部が作られましたが、「聞こえないと、硬式野球は危険」という理由で高等学校野球連盟への加盟を拒否されました。日本聴力障害新聞がこの問題を取り上げたことをきっかけとして世論が大きく動き、高野連の内規改正により、同校の野球部は大会への出場を果たしています。山本おさむ氏が漫画化した『遙かなる甲子園』が知られています。



学校でのスポーツ活動

▶ 地域の学校でのスポーツ活動

地域の学校の体育授業では、教員の説明や指示を聞き取れない、生徒同士の掛け声がわからない、音楽に合わせられないなどの理由で、バレーボールや創作ダンスなどチームによる活動に苦手意識を持った体験が多く聞かれます。水泳の授業で補聴器を外すため困ったという例もあります。部活動でも、監督の指示や他の選手への指導内容がわからなくて困ることが多く、長距離走の周回練習中にマネージャーが呼びかけるタイムが聞こえないというような例があります。

きこえなくてもスポーツ分野で活躍している生徒や社会人のことやデフリンピックのことを知る機会がないことも、地域の学校で学ぶ中の課題です。

▶ 様々な学校環境

ろう学校と地域の学校の両方を経験したきこえない人も多くいます。ろう学校から地域の学校に転校(インテグレーション)して子どもの人数の多さやレベルの高さにびっくりし、きこえる児童・生徒や教員とのコミュニケーションに適應できず苦労した経験があれば、逆に地域の学校からろう学校に転校した時に、人数の少なさやレベルの違いに戸惑いを感じ、きこえない児童・生徒同士のコミュニケーションへの不慣れもあって、体育の授業や運動系の部活動で周囲の人との溝や壁を感じたという経験も多く聞かれます。

レクリエーション

▶ 地域のふれあいスポーツ

学校を卒業して社会人となったあとも、地域できこえない人同士が集まってスポーツ活動を楽しむ例が多く見られます。自治体が開催する障害者向けスポーツ教室や、ろうあ協会が中心になってのスポーツ活動があります。生涯スポーツでは、ソフトボール、ボウリング、ソフトバレー、ゲートボール、グラウンドゴルフなどがあり、地域の一般チームと交流する時は手話サークルのメンバーがチームに入ったり、通訳をしたりする例も多く見られます。

ゲートボールでのふれあい

奄美大島で生まれ育ち、学校に通ったことが一度もなく、家族だけに通じる手話を使ってきた山下千代子さんは、きこえない娘の家族と同居することになり、長崎へ引っ越してきました。コミュニケーションがなかなか通じない山下さんの大きな楽しみはきこえない仲間とともに楽しむゲートボールです。一所懸命ルールを覚えて、毎回のように参加する山下さんのスポーツ活動を、地域の仲間は「運動神経がいいわね、昔何かやっていたんじゃないの!」と応援しています。



一般の競技大会に参加する

▶ 一般競技大会の情報・コミュニケーション保障

一般の競技大会に参加するきこえない選手がもっとも不便に感じるのは情報・コミュニケーションの面です。試合開始のアナウンスがわからない、スタート合図の音がわからない、審判が笛を吹く音がわからない、審判の話していることがわからない、相手の選手が話していることがわからない、観客の声援が聞こえない、開会式の内容がわからない、運営スタッフの説明がわからない、記者取材に対応できないなど、不便に感じる事が多大にあり、大会の運営組織側にきこえない選手が出場した時の情報・コミュニケーション上の配慮が求められています。そもそも、一般の競技大会の出場申込書に聴覚障害があることを記載する欄はありません。

全日本トライアスロン宮古島大会

トライアスロンは国内だけでも年間200を超える大会があり、中でも宮古島大会はハイレベルで人気があるだけでなく、以前から障害のある選手の参加を認めてきたことでも知られています。きこえない選手も多く参加するこの大会では、事前登録、パーティ、ルール説明会に手話言語通訳がつけられる他、レース中も重要な地点に手話スタッフが配置されます。宮古島の手話サークルが協力しており、市民も大会開催前に手話の学習をするそうです。競技運営でも、きこえない選手を示す色分けしたキャップの準備や、欲しいドリンクの種類サインを決めるなどの配慮があり、大会の良いモデルになっています。



▶ スポーツに関する研修

競技選手は運動、栄養、休養のバランスを心がける健康管理の知識、及びアンチ・ドーピング規定の内容とドーピングを予防するための知識を学ぶ必要があるとされています。とくに、ドーピング予防ではうっかり飲んだ風邪薬や花粉症の薬、漢方薬、サプリメントに禁止物質が入っていることがあるために注意が必要とされており、スポーツ倫理の観点からも研修を受けることは重要です。

しかし、きこえない選手は一般の講習会に参加しても情報保障（手話言語通訳や要約筆記など）がなくては、配布されるプリントだけで内容を理解するのは極めて困難なことです。

情報保障が準備されたとしても、きこえない人の育った言語環境や受けた教育が様々であるために、「力を入れる」「力を抜く」「足がつる」といった日常生活でよく使われる日本語でも、手話言語通訳者の手話表現によってはきこえない人がその意味を理解できなかったという例があります。

また、きこえない人がスポーツ栄養士、アスレティックトレーナー、競技別コーチといったスポーツ指導者資格を取得するために講習を受けるときも情報保障の課題があり、これらの資格を取得したきこえない人の例はまだわずかです。2001（平成13）年の差別法令改正により、きこえない人が取得できる資格の範囲は広がりましたが、間接的な制限がまだ多く残されています。

デフスポーツに参加する

▶ 全国ろうあ者体育大会

全日本ろうあ連盟の主催で全国ろうあ者体育大会と全国ろうあ者冬季体育大会が開催されています。14ページの「デフスポーツの活動状況」でわかるように、軟式の野球競技がもっとも古い歴史を持ち、1955（昭和30）年の第1回全国ろうあ者野球大会では地区代表8チームが参加しています。

全国ろうあ者体育大会は文字通り全国からきこえない選手が参加する大会であり、きこえない選手が不便さを感じないように、参加申込みから旅行手配、開・閉会式、競技運営、附带行事まであらゆる面で情報保障体制が整えられています。そのために自治体の協力が不可欠であり、地域のろうあ協会を中心とする大会実行委員会が登録手話言語通訳者をはじめとする地域の様々な人的資源を活用する形をとっています。

各競技の運営は全日本ろうあ連盟スポーツ委員会が任命する技術委員が地域の競技団体の協力を得る形であり、ここでも情報コミュニケーションの保障が非常に重要なものとなっています。

なお、デフリンピック日本代表を決めるために、全国ろうあ者体育大会とは別に記録会や選手権大会などがろうあ者競技団体主催で開催されており、リラックスした雰囲気の中で好記録が出ることもしばしばあるようです。



▶ 国際的なデフスポーツ大会

きこえない選手が腕を競い合う国際的な総合スポーツ大会であるデフリンピックは、4年ごとに開催されるデフスポーツの最高峰の大会として位置づけられています。デフリンピックに出場してメダルを取ることがデフアスリートの夢であり目標です。

デフリンピックを主催する国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）はデフアスリートの活動を支えるために、競技ごとの世界選手権大会を主催するほか、デフリンピック地域予選を設けて出場選手の競技レベルの向上を図っています。ICSDには4地域の連合があり、日本はアジア太平洋ろう者スポーツ連合（APDSC）に所属します。

デフリンピックでは、補聴器または人工内耳を外した状態で、聞こえが良い方の耳の平均聴力レベルが55デシベル以上であることが出場条件とされ、競技会場では練習時間を含めて補聴器等を身につけることは禁止されています。その代わりに、スタート合図を光の点滅で示す装置や審判による旗の使用など、視覚的な工夫がなされています。

デフリンピックのメダリストにはオリンピックでも活躍できる力を持つ選手もあり、水泳の北島康介選手と同種目で記録を争ったテレンス・パーキン選手（南アフリカ）が知られています。一方、パラリンピックにきこえない選手が出場するカテゴリーはありません。



デフスポーツに参加する

▶ 強化合宿

デフリンピック競技の国内団体は、スポーツ庁の補助金事業にて選手の育成強化に取り組んでいます。度々行われる強化合宿では、監督、コーチ、スタッフと選手間の意思疎通が重視され、手話言語通訳者もスタッフの一員としての重要な役割を担っています。通訳者が度々代わることで意思疎通が不安定になるため、各競技の知識を身につけた通訳者を確保したいというニーズがあります。

強化合宿とデフリンピック出場を通して手話言語を習得し、デフスポーツの意義を知ったというきこえない選手も多くおり、きこえない選手同士のサポートも強化合宿の重要な課題となっています。

▶ 国際手話コミュニケーション

デフリンピックなど国際的なデフスポーツの大会に参加する各国の選手は、自国の手話言語だけを使って通じ合うことができないため、お互いにわかる身振り表現を主に使う「国際手話」というコミュニケーション方法をとります。自国の手話言語や他の国の手話言語に堪能であれば、それだけ国際手話にシフトして各国の選手との会話に弾みが出るということです。逆にいうと、手話言語がまだ身につけていない選手は国際手話コミュニケーションの輪に入れず寂しい思いをしたという体験も聞かれます。

国際的な大会では開・閉会式、競技運営、表彰式などを円滑に進めるために、国際手話が公式なコミュニケーション手段とされ、音声に対しては国際手話通訳が配置されます。

▶ メディカル体制

デフリンピック等の大会中、練習時においても怪我をする選手はもちろんいます。日本選手団のメディカル体制は数年かけて整備されてきていますが、怪我の具合によっては現地の医療機関で治療を受けることもあり、異国の言語と文化に対応できる通訳の緊急的な確保が必要になります。

感染症の防止も選手・スタッフ一人ひとりの課題であり、第21回夏季デフリンピックで日本選手団にインフルエンザ罹患者が数名発生し、拡大を最小限に抑える対策が取られたことはまだ記憶に新しいところです。

各選手のドーピング検査(競技会外検査含む)への対応力の強化も大きな課題です。

▶ 表彰式

オリンピックやパラリンピックと同様、デフリンピックでも表彰式では国旗が掲揚され、金メダル選手の国の国歌が流れます。「君が代」のメロディーが聞こえない、斉唱ができないなどで寂しい思いをした選手が多くいます。

第23回夏季デフリンピックでは女子バレーボール競技で日本チームが優勝し、表彰式で流れる国歌に合わせてチーム全員が手話表現する光景が見られました。決勝試合の前夜に練習したとのことですが、今は手話言語版の確定作業が進められており、試行版をウェブサイトで視聴することができます。



デフスポーツの活動状況

日本では全国ろうあ者体育大会(冬季大会含む)、全国障害者スポーツ大会、国際ではデフリンピック(夏季・冬季)、ICSD公認世界選手権大会の4大会において開催されている競技と、活動団体の有無をまとめた表です(2021年3月末時点)。国内ろうあ者競技団体の名称と大会情報については、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会のウェブサイトをご参照ください。 <https://www.jfd.or.jp/sc/sportsassoc>

	全国ろうあ者 体育大会	全国障害者 スポーツ大会	国内ろうあ者 選手権大会	デフリンピック	世界ろうあ者 選手権大会	国内ろうあ者 競技団体
軟式野球	夏季(65)					○
卓球	夏季(53)	○	○	夏季	○	○
バレーボール	夏季(51)	○	○※3	夏季	○	○
陸上競技	夏季(49)	○	○	夏季	○	○
サッカー	夏季(39)		○	夏季	○	○
テニス	夏季(38)		○	夏季	○	○
ボウリング	夏季(32)		○	夏季	○	○
ソフトボール	夏季(27)		○※4			○
バドミントン	夏季(27)		○	夏季	○	○
バスケットボール	夏季(20)		○	夏季	○	○
フットサル	※1		○	冬季	○	○
ゲートボール	※2					
ビーチバレー			○	夏季	○	○
自転車ロード				夏季	○	○
マウンテンバイク				夏季	○	○
ゴルフ			○	夏季	○	○
ハンドボール				夏季	○	○
柔道				夏季	○	○
空手				夏季	○	○
オリエンテーリング				夏季	○	○
射撃(ライフル)				夏季	○	○
水泳		○	○	夏季	○	○
テコンドー				夏季		○
レスリングフリースタイル				夏季	○	
レスリンググレコローマンスタイル				夏季	○	
硬式野球						○
セーリング					○	○
ラグビー						○
サーフィン			○			○
アーチェリー		○	○※5			○
フライングディスク		○				
アルペンスキー	冬季(43)			冬季	○	○
スキー技術	冬季(18)		○			○
アルペンスノーボード	冬季(13)			冬季	○	○
クロスカントリースキー	冬季(1)			冬季	○	○
スノーボードフリースタイル	冬季(1)※6			冬季	○	○
カーリング			○	冬季	○	○
チェス				冬季		
アイスホッケー				冬季	○	

※1 オープン競技として2回開催 ※2 全国ろうあ高齢者ゲートボール競技大会を開催
 ※3 ジャパンデフバレーボールカップ開催。40歳以上のジャパンデフマスターズバレーボールカップも開催。
 ※4 ジャパンカップデフソフトボール開催 ※5 ジャパンデフアーチェリーオープン開催 ※6 ハーフパイプ

第23回夏季デフリンピックに出場、メダルを取った選手4人に、スポーツ活動で困ったことを話していただきました。動画を下記サイトに掲載しています。



<https://youtu.be/PBvezrrD2MM>

スポーツ大会の開・閉会式、表彰式などで斉唱される国歌「君が代」の手話言語版を紹介する動画を下記サイトに掲載しています。



<https://youtu.be/gaA-zti-IyA>

【関連情報】

「Deafsportal(デフスポータル)」

デフスポーツ・デフリンピックの情報を発信する総合ポータルサイトです。最新情報が随時更新されています。
<https://deafsportal.com/>



「スポーツ手話ハンドブック」

スポーツ大会や式典、大会運営に関わる人に役立つ用語を中心に幅広い分野の手話を246単語収録、さらにスポーツ関連の情報を掲載しています。
<https://jfd.shop-pro.jp/?pid=132926516>



「聞こえないスポーツ選手のメディカルサポートについて」

聴覚障害ならではの特性や事例などをより深く知っていただくきっかけに作成しました。
<https://www.jfd.or.jp/sc/files/2019/20190329-medical-support.pdf>



デフスポーツにおける手話言語通訳者の育成等に係る検討委員会 委員名簿

- 一般社団法人日本ろうあ者卓球協会 …… 井出 敬子
- 東京手話通訳等派遣センター …… 江原 こう平
- 国立大学法人筑波技術大学 …… 大杉 豊
- 一般社団法人全国手話通訳問題研究会 …… 桐原 サキ
- 一般社団法人日本手話通訳士協会 …… 草野 真範
- 社会福祉法人全国手話研修センター …… 小出 新一
- 一般社団法人日本ろうあ自転車競技協会 …… 高島 良宏
- 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会医科学委員 …… 中島 幸則
- 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 委員長 …… 小椋 武夫
- 全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 事務局長 …… 嶋本 恭規

(委員名はスポーツ委員会以外は五十音順)

デフアスリートをささえる vol.1

発行日 2021年3月31日
 発行 一般財団法人全日本ろうあ連盟
 スポーツ委員会
 TEL:03-3268-8847
 FAX:03-3267-3445
 メール:jfd-sc@jfd.or.jp
 URL: <https://www.jfd.or.jp/sc/>

一般財団法人全日本ろうあ連盟 **スポーツ委員会**

このガイドブックは、令和2年度スポーツ庁委託事業「障害者スポーツ推進プロジェクト（障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究）」（スポーツに精通した手話通訳者の育成）の一環で作成しました。